

ONE LOVE 通信 44号

2011年6月19日発行

まさかこんなに大変なことが起こるとは予想もしていませんでした。

東日本大震災で亡くなられた方たちのご冥福を、ワンラブのスタッフ一同、心からお祈り申し上げます。また被災され心身ともに大変な思いをされている皆さまの、一日も早いご回復を、遠い空の下からではありますが祈っております。



【毎年この時期には…】

「東京もものすごく揺れて今も余震でこわい。今津波警報中」

3月11日、こんなメールを受け取った。地震の多い日本のこと、それを見て私は「ああ、また地震があったのか」くらいに受け止めてしまった。だんだんとその詳細を知ろううちに、簡単に流してしまった自分を責めた。それはいまだかつてないくらい大きい地震だった。

ルワンダにいて地震の情報を集めたものの、あちこちのメディアからつぎはぎの情報が入ってきて、どれが真実なのかわからない。わからないから、しばらくの間、現実感がわいてこなかった。ルワンダはネットのスピードが遅く、動画を見ることはほとんどない。でも現実を知りたくて、ブツブツと途切れ途切れの津波の映像を見た。それは想像をはるかに超えた自然の力だった。

被害の大きさに、驚いた人たちは一人、また一人と被災した人たちのために立ち上がっていく。遠くにいて、何もできない自分にいら立った。

そんな気持ちをガテラに話すと、彼の答えはこうだった。「まず祈ろう」

もう4月に入っていた。4月はルワンダの人たちにとって、忘れてくても忘れることのできない月。17年前に起こった大虐殺。亡くなった人たちのために、毎年4月は国全体が喪に服す。そうだ、今回は震災で亡くなった人たちのためにも喪に服そう。

4月7日から13日までは虐殺で亡くなった人たちのための服喪、15日から22日までは震災で亡くなった人たちのための服喪。

震災後、たくさんのルワンダの人たちから「家族や友だちは大丈夫か？」と聞かれた。普段は仕事で、いつも彼らに対して目くじらを立ててしまっている私だが、この時は彼らの思いやりがありがたかった。

服喪と言っても特別なことをするわけではない。活動の資金を生み出すために運営しているレストランで、毎晩たき火をして、みんなでそれを囲み、祈りながらあれこれお話をしようと言う、ただそれだけ。



地震で亡くなった人たちのための喪が明けると22日には、チャリティディナーを開き、募金を集めよう。早速行動開始。政府機関や大使館、会社、NGOなど、あちこちに招待状を配った。それに関心を持ってくれたラジオ局からはインタビューを受けた。スタジオで日本人たちへの思いを語るガテラ。放送の最中のコマーシャル。それは子供がサトウキビを抱えて飛行機を待っていると言うシチュエーション。

「坊主、どこに行くんだ?」「日本では大きな地震があって、みんなおなかをすかしている。だからこのサトウキビを日本人にあげるんだ」「そうか、感心だな。それでいつ帰って来るんだ?」「しばらくは帰れない。なぜならば世界中におなかをすかせた人がたくさんいるから、みんなにサトウキビを配らなきゃ」こんなやり取りをルワンダ語で交わしている。



ラジオ局のインタビューを受けるガテラ。熱くなってきて、だんだん体が前のめりに…。

夜、レストランでは虐殺のこと、津波のこと、そして全くそれらとは関係のないおしゃべり。一つのたき火を囲んで、いろいろな人種が語り合う。深々と冷え込んだ夜更けに囲むたき火は、みんなの心を開いてくれた。普段はこんなこと話さないのに…と言うようなプライベートなことも自然と口から出てきた。

しかしみんなタフである。夜中になっても全く帰ろうとしない。むしろ元気になっていくようだ。少々疲れ気味の私は、毎晩一足お先に床に就くのであります。

4月21日には、ワンラブのスタッフほぼ全員で、キガリ市内にあるジェノサイドメモリアルへ。ここはルワンダの歴史、虐殺の始まりと終わり、そして世界のあちこちで起こったホロコーストについてなどが展示されている。私自身は何度も訪ねたことがあるが、ワンラブのスタッフみんなと訪れるのは初めてである。虐殺をやった側とやられた側、両方の民族が一つの歴史を考えるためにメモリアルに集まっている。一体それぞれ何を考えたのだろう。頭蓋骨を展示してある場所がある。そこに入るのを拒んだスタッフ。それがどういう意味なのか、私には問うことができなかった。

このメモリアルには合同のお墓があり、海外から要人が来た時は必ずと言ってよいほどここを訪れ、花を供える。私たちも前日にオーダーしておいた花を供えた。何故かルワンダで供える花は、いつも透明のビニールで包装されてしまう。ビニール袋の使用を禁止しているルワンダの割には、この辺りに落ちない。しかもビニールで包まれてしまった花はどことなく息苦しそうだ。…と言う訳で、そのビニールを取り払って供える。早速集まってくる虫たち。ほ

らね、この方がずっと自然でしょ?

そして最終日の22日。この日のためにワンラブ・ランド内に震災で亡くなった人たちのための「東日本大震災慰霊碑」を作った。本当はワンラブ・ランドの中にある大きな石をモニュメントにするつもりだった。日本で言えば「えんやこら、どっこいしょ」という感じの掛け声をかけながら、10人がかりで持ち上げようとするものの、びくともしない。それ故、小ぶりの石を見つけ、土台を作りモニュメントにした。



モニュメントのための石を、川から持ってこようとするものの、大きすぎて持ちあがらない…。

朝、少し天気はぐずついたものの、だんだんと人が集まってきた。ワンラブのスタッフたちは、庭にはえている花をそれぞれ手にしている。ルワンダで奮闘している青年海外協力隊の人たちもたくさん来てくれた。

集まってくれた人たちに感謝の気持ちを伝えると共に、亡くなった人たちへのお祈り、そして慰霊碑にお花を供えた。



そしてこれが出来上がったモニュメント。お花をたくさん供えました。

ワンラブは今までず〜っと日本人たちに支援されながら、今日までやってきた。日本人たちがいなかったら、何もできなかっただろう。亡くなった人たち、被災された人たちの中には支援者もいるかもしれない。いや、例えいなかったとしても、日本人たちが大変な思いをしている時に、じっとしていることなんかできない。ワンラブのスタッフはそう思ってくれていたかもしれない。

22日には慰霊碑に花を供えるから…としか伝えていなかったのに、前日パトリックから紙きれを渡された。日本で義肢製作の研修を受けたスタッフたちは日本語のメッセージを用意していたのだ。本当に自分たちで考えたの?と思いたくなるような立派な内容だった。

「日本でたくさん勉強しました。日本人にたくさん助けてもらったので、感謝いたします。とてもありがとうございました。東日本大震災において被災された方々、並びにそのご家族、ご友人の皆さまに心からお見舞いを申し上げます。また命がけで救出活動に当たっていらっしゃる方々に、心から感謝を申し上げます。少しでも早く救助・復旧が進みますように、お祈り申し上げます。私たちががんば

りますので、日本の皆さんもがんばってください」

この声が被災地まで届くといいな。

そして夜、チャリティディナー。残念ながらこの日は、ルワンダの休日と重なってしまったので、あまり人が集まらなかった。結果的には募金も集まらず…。でも被災者救済キャンペーンと称して、この先も何らかの形で募金活動を行おうと思っている。多分、復旧は持久戦になってしまうだろう。いつになるかわからないけれど、少しずつ募金を集め、被災地に贈りたいと思う。

実は今回の喪は、私にとっては個人的な服喪でもあった。中学生の時に母を亡くしてから、ずっと連絡を絶っていた母方の親戚と、父の病気と死をきっかけに、また連絡を取り合うようになっていた。実に30年以上ぶりに。日本に行ったら会いに行くねとメールでやり取りをしていたのに、その叔母があまりに突然に亡くなってしまった。会いに行くこと約束をしたのに、日本に戻れば仕事の忙しさを言い訳に、会いに行くことをしなかった。ああ、自分の中でまた後悔が一つ増えてしまった。

この3月と4月は、人を失うと言うことについていろいろと考えた。虐殺で亡くなった人、地震で亡くなった人、そして私の叔母。それぞれに、それぞれの人生があり、ほぼ全ての人が、望んでもいかなかった死を迎えてしまった。愛する人を残して…。

これからは、明日できることは明日しようではなく、明日できないかもしれないから今日やっておもうと考えることにしよう。考えるのは怖いけれど、もしかしたら明日と言う日がないかもしれない。だから今日を大切に。

今、日本そして世界の人たちが何かできることはないかと、手を差し伸べている。争いばかりの世界だけど、本当はみんな暖かい心を持っている。そう信じたい。

集まってくれた人たちに、毎年この時期、この場所で、ルワンダの人のため、そして日本人のために祈りましようと言えました。

【そしてちょっと残念なこと】

そんな感じで約2週間にわたる喪を無事に明けることができました。本当に日本人たちを思って集まってくれた人たちには感謝です。

ただ一つ、在ルワンダ日本大使館から、どなたも参加していただけなかったのが残念でした。きっとお忙しかったのだと思います。今回招待状をお渡ししてから式典まで、あまり時間の余裕がなかったので、次回はもっと余裕を持って招待状をお渡ししたいと思います。

【あちこちで募金活動】

ガテラが育った障害者の施設。今日はそこで募金活動のためのミーティング。

この施設はカトリック教会がバックにあり、ローマから資金援助も受けているらしいが、実際は運営が大変らしい。施設の子供たちは、病気になると施設内の病院で治療を受けられるらしいが、治療費も馬鹿にならず、施設としてその資金を集めようと言う作戦である。

ミーティングはキガリから2時間ほど離れたブタレと言う町で行われる。朝7時に出発し、ゆっくりとそこへ向かう。

途中、以前から私がほしかった壺を行商しているおばさ



ルワンダ事務所代表ガテラより

【過去の記憶】

人間の記憶を消すことはできないのだろうか？

人は生きている限り、過ちを犯す。

間違いをしたくないと思っても、気がつかないうちに、あるいは避けられずに、いつの間にか過ちを犯している。

または傷つけたくない、傷つけられたくないと思っても、どこかで誰かを傷つけ、自分も傷つけられている。

そんな辛い思い出を、コンピュータの「削除」キーを押すように、あっという間に消し去ることができたら、人はどんなに楽になれるだろう。

そしてその記憶が自分の中に蓄積される前のように、心を元に戻すことができれば…。

私にも辛い過去がある。

犯した過ちに苦しむこと、そして傷つけられた思い出。

それらは一生、心の中に膿を持ったまま、堅いしこりとして残るだろう。

ルワンダで起こった大虐殺。ルワンダの国籍を持つ人たちほぼ100パーセントが、何らかの形でその虐殺に関わっている。

殺し、殺され、残された人間は、その塊をいつものどの奥に詰まらせながら生きている。

あれから17年が経つけれど、4月に行われる追悼集会では、最初から最後まで会場に泣き叫ぶ声が響いていた。

決して消えることのない記憶。いや、むしろ心の痛みは強くなっていくのかもしれない。

だから誰か、辛い思い出を消し去ることのできる、夢のような機械を発明してください。

また一からリセットできれば、人々は新たに人生を素晴らしいものにすることができる。

それができないから、人はいつまでも苦い思いを心の中に残したまま、生きていかなくてはいけないのである。そして罪を犯した人間は、その罪を背負いながら…。

んとすれ違った。

素焼きの壺で、すぐに壊れてしまいそうなもろいものだが、いかにも手作りと言う感じで、非常に素朴かつ哀愁がある。蓋つきのその壺を500フラン(約70円)で購入。

会場に着くと、ミーティングは既に始まっていた。会場には障害を持った子を持つお母さん、お父さんたちが100人以上集まっていた。

今回の募金はそれらお母さん・お父さんたちが対象。彼らも決して裕福ではないかもしれないが、少しずつ募金をして、子供たちが病気になった時の資金として貯めておこうという狙いである。

代表のあいさつや何故この募金が必要かと言うことをお母さんたちに話した後、ガテラにマイクが回ってきた。ガテラはその施設で育ち、現在障害者支援の活動に携わっていると言うことで、今回の募金のために結成された組織の副代表にもなっている。

こういう時ガテラは話が上手だと思う。会場にきている人を笑わせながら、ポイントを押さえ、相手に語りかける。

…とそんなふうに語っていたら、突然!

「今、話を聞いているだけでなく、早速募金をしましょーう!」と言う展開になった。

そしておもむろにさっき買った壺をみんなの前に置いた。更に私に向かって「さあ、まず最初の募金をしましょーう」と言うではないか!

そうみんなの前で言われてしまったら、断る勇氣は私にはない。たくさん募金するほど余裕はないし、しかし余り少なかったらみんなにケチだと思われる…など心で葛藤した末、約200円の募金を入れた。

そして次から次へと、お母さん、お父さんが立ち上がり、壺に募金を始めるではありませんか!

う〜ん、この辺の進め方、実にタイミング良く、あっぱれなのであります。

ひとしきり募金が終わったら、今度は私にもマイクが回ってきた。人の前で話すのは緊張するし、話すことをまるっきり用意していなかったので焦った。やっと話せたのは「ガテラは以前からこの施設のことをいつも話してくれていました。子供の頃、ピクニックに連れて行ってもらった話、教会の神父さんにかわいがられ、こっそりと神父さんのベッドに忍び込んで一緒に眠ったことなど。今回、同じように施設で育てている子供たちのために、私たちも出来ることがあるかもしれません。一緒に何かが出来たら嬉しいです。」

で、今日集まった募金、約12,000円。

70円で買った壺から12,000円生まれました。

この壺も、こんなふうに使われるとは思っていなかったことでしょう。

でもなんとなく幸せを呼ぶ壺のような気がして、これから大事に大事にしたいと思います。それとも、これ、私の貯金箱にしようかな?



紹介します! ワンラブのスタッフ

ワンラブ・ランドはとても広い土地なので、その中の治安を守るのは大切な仕事。

昼夜のセキュリティ人員は約12人(約、と書いたのは辞めたり新しく入ったりと出入りが激しいため…)。その多くは大虐殺後、まだ幼く、ストリートチルドレンとして生きていかなければいけなかった子供たち。町で物乞いをしていた時に、物乞いをするよりは仕事をしてお金を稼ぎなさい!とガテラに説教され、ワンラブにやってきた子供たちでした。

最初は建築作業の手伝い。レンガを作ったり、穴を掘ったり、石を運んだりと言う単純作業。それでも働くと言うことに楽しみを感じ、朝から晩まで汗みれで一生懸命働いてくれました。最初の給料でみんなが買ったものは、真っ白なスニーカー。アフリカの太陽の下、あまりの白さに、目がぱちくりしたのを覚えています。

ストリートチルドレンだったと言う立場から、毎日朝から晩まで働くと言うことに慣れず、辞めていった子たちもたくさんいます。でもその中には、根気よく真面目に働いてくれた子もいます。単純作業から、少し技術と責任が必要になる建築作業を任せられるようになり、手先もどんどん器用になってきます。

そして更に真面目に働いてくれた子たちにセキュリティになってもらいました。ワンラブ治安部隊の発足です。



ワンラブの治安は僕たちに任せなさい!
ちょっと頼りないところもあるけれど。

夜のセキュリティは辛い仕事です。真っ暗な中、朝の来るのを待つしかありません。だからときどき居眠りをしてしまいます。外出して、夜遅く帰ってくると、既にセキュリティは眠り込んでしまい(!)、門の外でいくら車のクラクションを鳴らしても起きません。こんな時は嗚!セキュリティの仕事をしているのに、眠りこけるとは何事だ!と言うふうに。

でもときどき手柄を立ててくれます。夜中、ランド内に侵入してきた輩がいます。そいつを見事に捕まえてくれたのであります。この時ばかりはほめたたえました。

子供と呼ばれる年齢から、10年以上が経ち、今、立派な青年に成長しました。その姿を見ると、時々失敗はするものの、喜びを感じざるを得ません。

さあ、セキュリティの皆さん、今日も眠らずにがんばるのだぞ!(しかし頼りないので、ワンラブには番犬が15頭いると言うのも現実…。夜はランド内に放たれ、あちこ

ちをチェック。実はセキュリティよりも頼もしい…。)



今号の患者さん

1997年に活動を開始した時、最初の患者さんとなったフェリックス。工作中、車を運転している時に地雷を踏んでしまい、両足をなくしてしまった青年です。

ある日、忙しくて昼食を作る暇がないので、レストランで食べようと仕事場を出ると、そこに一人のおじさんが。

「フェリックスだよ」ガテラがそう言い、目を凝らして顔を見ると…。おお、そこには14年経って、すっかりおじさんになってしまったフェリックスがいるではありませんか！

思わず車を降り、駆け寄ってしまったのであります。

最初、とても不安そうに義足を履いて歩いていた彼の姿はなく、杖を使いながらもしっかり大地に足を踏ん張って歩いているフェリックス。

嬉しくてじ〜んとしてしまった。

その後、仕事を辞め、今はキガリで生活をしていること、実はとても近くで働いていることなどを話してくれました。初めてワンラブを訪れた時には、両足がないため、父親に抱きかかえられて連れてこられた彼。その父親も元気だと言うこと。



大事に大事に履いてくれた義足。14年間もちました。ウラコゼチャーネ（ルワンダ語でありがとう）。

ああ、この14年間、辛いこともたくさんあったけれど、やっぱり続けていて良かったなあと実感したひと時。

彼が最初の患者さんだったと言うこと、親方のもとを離れ、初めて自分で、そして難しい両足の義足を作らなくてはいけなかったと言うこと、また義足を作っている間、日本のテレビ局がその工程をドキュメンタリーにしてくれたことなどがあり、彼のことはしっかり記憶に刻まれ、また義足を履いた時に、彼の父親が心配そうに見守っていた姿などが一気に頭の中によみがえり、その日は一日興奮状態で過ごしました。

嬉しかったのは、自分も義足を作る勉強をしたいと言ってくれたこと。それが実現するかしないかは別として、そう思ってくれる心が嬉しかった。

14年履いた義足はもうボロボロで、とりあえず修理はしたものの、また作るからいつでも来てねと伝え、別れた私たちでした。

彼を見て、すっかりおじさんだと思ってしまったが、彼も私を見て、同じことを思ったに違いないと言うことを付

け加えておきます。

【9月、アビリンピック再び】

2007年静岡で行われたアビリンピック大会に、障害を持つ女性を連れていきました。アビリンピックとは障害者の職業技能を競い合う世界的な大会。今年9月、今度はお隣韓国で行われます。

現在、選手選び・資金集めの真っ最中。

さまざまな競技がありますが、何としてでも今回は参加したいのが、義肢製作部門。

切断部に装着するソケットのインサート製作の善し悪しを競い合います。何といてもワンラブの看板は義足作り。その競技に参加しない手はないではないか。

自分で工房を開き、独立したセザールも含め、近々、ワンラブのスタッフたちと、誰が一番上手に作れるか、国内大会を開く予定。それに見事勝ち抜いた人が韓国へ。

今回は3人の選手を連れていきたいと思っています。義足製作、そしてそのほかの競技に参加する選手も、現在選考中。バスケット製作、洋裁、パソコンなどいろいろな競技がある中、前回出場したアニエスおばさんにも力を借りながら、あれこれと作戦は進んでいきます。



2007年アビリンピックに参加したアニエスおばさんとガテラ。他の選手と一緒に、とても楽しそう。

このアビリンピックと言う大会、まだ知名度はほとんどありません。前回も多くがアジア圏からの参加でした。アフリカ勢にいたっては、参加の手続きを進めていたけれど、どうしても予算が足りず、来ることができなかった国もあったようです。

私たちは、このアビリンピックを非常に大切な大会だと思っています。障害を持ったことによって、人の世話にならないと生きていけない人たちとされているケースも、残念ながらあります。

だから彼らがその生きていく力を発揮できるこの大会、とても意味があると思います。

実際にその大会に参加してみると、彼らの際限ない能力に脱帽です。ルワンダの障害者が国外に出られるチャンスはまだ少ないです。パラリンピックに参加した時もそうでしたが、自分の国以外の障害者に出会うことが本当に嬉しそうで、言葉がうまく通じないにもかかわらず、何故か彼らコミュニケーションが取れています。

私は出来ればルワンダの伝統的な技術を使ったバスケット作りの出来る人を連れていきたいなあ。でも果たして大会で出される題材や材料をうまく使いこなせるだろうか？楽しみだなあ。

ルワンダから韓国までの道のりは遠いです。

日本の皆さま、ぜひ3人の選手を送り込むために、参加費用のご協力をお願いします。



日本事務所より

【ルワンダ旅行を予定している人たちへ】

ワンラブではルワンダの首都キガリ市に、活動の資金を生み出すためのレストランとゲストハウスを構え、運営を進めています。

おかげさまで少しずつではありますが、お客さまも増え、最近では車でアフリカ大陸縦断中と言う人たちも、ときどきキャンプサイトに泊ってくれたりします。

レストラン内のバーでは、肌の色に関係なくみんな酔っ払い、夜遅くまで騒いだりしています。

今回、日本で地震が起こった時、ここでたき火をし、みんなで語り合いました。何かできることはないかと。

遠くにいたので、直接何かをお手伝いすることはできません。でも日本で大変な思いをした人たちが、もしもルワンダに来たら、私たちの出来る範囲でおもてなしをしたいと。そこで！

9月30日までにワンラブのゲストハウスに泊ってくださった日本人、宿泊費を通常の30%オフにさせていただきます。そしてその浮いた分の費用を、ぜひ被災された方たちに贈ってあげてください。

皆さまのお越しをお待ちしております。

【ルワンダ・ブルンジの心を伝えたい】

今回、服喪中に電話をもらいました。ピーターさんと言う男性です。

「僕の名前はピーターです。農業をしています。日本の人がルワンダに来たら、ぼくが作ったおいもを二袋分けたいと思います。みんなで食べてください。」

彼の家だって、多分決して裕福ではないと思います。でもその大切に育てたおいもを二袋分けてくれる、その心意気が嬉しいです。

またアンジェと言う名前の女性は携帯にメッセージを送ってくれました。

「私はアンジェと言う名前です、キガリに住んでいます。日本の人たちがルワンダに来たら、ホテルに泊まるのではなく、ぜひ私の家に泊ってください。そしてたくさんリラックスしてください。私が作ったルワンダ料理も食べてくだ

注意をしながらワンラブ通信の発送を行っておりますが、宛名や住所が違う、2通来るなどのことがございましたら、ご連絡ください。

さい。待っています。」

こんな気持ちがありがたいです。

会う人会う人、みんなが地震の被害の大きさに驚き、慰めの言葉をかけてくれます。地震と言うとても恐ろしい天災をきっかけに、人の心の中で何か少し変わってきたような気がします。

それは日本人だけでなく、ルワンダ人やブルンジ人、そして世界中の人たちの中に広がっていく予感がします。

オサマ・ビンラディンが殺された時、歓喜したアメリカの人たちを見ました。そしてそのはしゃぎ様にぞっとしました。テロには反対です。でも人の死に対してあれだけのはしゃぐと言うのも異常だと思います。

やられたらやり返す、これではいつまでたっても平和は訪れません。ルワンダはそれをしなかったから、大きく発展しました。

ピーターさんがおなかをすかせた人においもを分けてくれるように、アンジェが疲れた人をおもてなししてくれるように、私たちが出来る限りの愛情を人に注いでいきたいものです。

【ワンラブ新体制】

今回、ワンラブ日本事務所の体制が新しくなりました。それぞれ皆さんボランティアで手伝っているのですが、役割分担をし、ひと月に一度、茅ヶ崎の事務所（兼ルダシングワ真美の自宅です）に集まり、作業を進めるようになりました。

このワンラブ通信も新体制になって初めての発行です。私ルダシングワ真美は、原稿のみを書き、ルワンダからの遠隔操作（！）となりますが、皆さまのもとに無事に着いたことを祈っております。

ワンラブ日本事務所としては、皆さまのご意見などを積極的に取り入れていきたいと思っています。ルワンダ・ブルンジについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見など、どしどしお寄せください。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、相変わらずボランティアも募集しております。またルワンダ・ブルンジで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

【おことわり】

*発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

*当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いております。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町12-28-304 TEL: 0467-86-2072/080-6564-4448

e-mail: info@onelove-project.info (日本事務所) onelove@rwanda1.com (ルワンダ事務所)

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信 44号 2011年6月

発行：ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>



One Love
Mulindi Japan One Love Project

